

## 追想

合併は悲しからずや

人は右 魚は左で

浜は声なし

離島に住む知人の昨年の賀状の文句である。これを最後にバツタリと消息が途絶えた。

かつて故郷の島に帰る度に、必ず極上のうにを持って来てくれたものである。老いた母上が息子が世話になるからと、心を込めてこしらえたものであった。そのうにも、もう口にすることはない。寂しい思いがしてならない。

又職場を共にした仲間の一人から、

「米寿を迎えましたので、今年で年賀の便りを終らせていただきます。肩を痛めだんだん字が書けなくなってきました。長い間いろいろとお世話になりました。」とあった。

寂しい賀状であった。

賀状も電話もない音信不通だった、かつての同僚がある日忽然とやって来て私を驚かせた。寂しげな笑みを浮かべ、コクリと頭を下げた。病だとすぐわかった。

かつて原因がよくわからない病気で苦しんでいた彼を、福岡の大学病院へ連れて行ったことがある。散々の検査を受け出来た調査書を見ながら、偉い先生はこう言った。

「空気の飲みすぎですね」

私は驚いて聞き返した。

「空気の飲みすぎ」

とハッキリ言われた。空気を飲まなかったらどうなるか、深呼吸はしているのか、私の頭は混乱した。薬をもらい病院を出たのは夕方だった。

市内でちよつといい宿をとり酒好きの彼のため、いい酒と旨い肴を注文した。彼は忽ち元気になり、検査結果に二人で大笑いした。

それ以来彼は立ち直り、健康を回復した。温厚な彼の元気な姿を見て、みんな心から喜んだものだった。その日、教え子たちの車での送り迎えが嬉しかった様子だった。

「それでは」

とつぶやきながら彼は深い溜息をついた。悄然と帰って行く彼の後姿に、最後の別れを感じ、私はこみ上げてくるものをどうしようもなかった。

赤穂浪士の討ち入りから三百六年になる。今は亡き上の兄は十二月十四日(討ち入りの日)生れであった。そのためだったのか、忠臣蔵に強い関心を持っていたようである。世評とは全く異なる見方をしていた。独特の鋭い感覚で全体像を見ていた。

泉岳寺に行った時、浪士たちの墓の粗末なものと小さいのに涙したものだが、いろいろ調べていくと、止むを得ないものであることがわかってきた。

釈迦は

「一切の衆生悉く仏性あり」

と命の平等を説いた。

だが戒名(法名)にはランクがある。

江戸時代の戒名(法名)は院殿大居士(大名用)―院居士(上級武士用)―信士(下級武士・農民・町民用)と身分に対応していた。

しかし武士は必ず居士号だったわけではなく、泉岳寺の赤穂浪士の墓も、家老の大石内蔵助だけが院居士で大きく、ほかの義士たちは信士で墓も小さい。

墓石も「高さ四尺(約一一〇センチ)までとされていた。

水戸藩では武士の墓石も二尺五寸五分(約七七センチ)以下に規制されていた。

今ではお金さえ払えば、誰でも殿様用の戒名がもらえるとと言う人もいる。

私の父は院号はいらないと遺言めいたことを言っていた。子供たちの出費を心配したのだろう。母は百

一歳まで生き、院号がついている。バランスが悪くあの世で父は苦笑いしているに違いない。

死んでしまえば、みんな同じだと思っただが、どうだろうか。

柳川の旨いうなぎが食べたくなった。柳川で一番旨い老舗の店は、持ち帰りは絶対できないので「俺は助かる」と生き残っている戦友は言っていた。

柳川に来たらうなぎ代だけは俺が全部負担するので、いつでもやって来いと言っていた。私も二度世話になった。最近は何間も老いて体が不自由だったり、この世を去ったりで誰も来なくなった。経済的には助かるがたまらなく寂しいと言っていた。「死んだらうなぎは食べられんぞ」と俺は言い続けてきたのだが……。

福島で戦友会をやった時、日の浦にコーヒー店があるのに驚いた様子だった。

「新築の川上コーヒー店の屋根赤く、けさ降る小雪に濡れてゆくなり」。メモにこんな短歌を残していた。恥ずかしいので妻には内緒で少数の短歌をメモしている。

店がだんだんと無くなっていくのは寂しいものである。

生活面でいろいろきびしくなる世の中、せめて人情面だけは……という思いが強くなる。

酒が全く飲めない私は宴会は苦手である。盃のやり取りほど辛いものはない。ある大きな結婚式に出席した時、いつものように旨いものを選び、一皿持ってこっそりと隅の方へ行き食べていた。ところが旨いものの皿を持って私の横に来た人(A)がいた。すると今度は滅多に口にする事のない高価な料理を盛った皿を持って、又一人(B)がやって来た。

飲めない男が三人顔を見合せて笑った。

私の父は酒は一滴も飲めなかった。

正座しかしなかった。あぐらができなかった。歌えなかった。(音痴)踊りは駄目。手拍子も駄目。

そんな父が秘かにマジック(手品)の研究をやっていた。人前でやることはなかったが、相当研修をやっていたようである。どういふつもりだったか、私にだけやって見せた。凄いと思った。

父親ゆずりの秘技をこの日初めてやった。驚いたのはマジックの名手として有名なAだった。

この日を起点として三人の交友が始まった。

年に一度Bの経営するホテルの最高の部屋で雑談した。破天荒な生涯を送ったB、雑談の名人A、この二人のことは、私の脳裏から消え去ることはない。

Aがこんな話をしたことがある。

自分の葬式に当って、楽しみにしていることがある。最後のお別れに来て下さった人にお別れの言葉をテープに吹き込んでいる。それをお聞きになった皆さんが、どんな反響をされるか、楽しみにしている。

永い間お世話になった人たちに心からお礼の言葉を申し上げたい、と話した。

そのA氏も今はあの世である。家族は悲しくて、あのテープは使用できなかったと私は思っている。

再生工場と綽名された戦友がいた。一人は医師、一人は音楽をやっていた。

戦後間もない頃、汚れた衣服を着てやって来た患者は彼から叱られた。診察の前に風呂に入れ幾らかの金を渡した。病が重い患者が来ると、付き添って来た者は叱られた。

「こんなになるまで、ほつといて、もつと人の命を大切にせい。いいか、本人も悪いがなあー」  
女性がオシヤレをせずにやって来ると、

「そんな格好をしていると、男は逃げるぞ。俺もあんまり診とうなか」そう言って笑った。彼に経済的援助を受けた者は多数居た。

田川に住んで音楽をやっていた彼の許に、ある有名な女性の民謡歌手が、落ち目になり頼って来た。

基礎の歌唱力がない。声の良さだけで一時的に売れただけ、と言い厳しい指導を始めた。それが幾月も続いた。

彼が指揮するオーケストラをバックに、血を吐くような特訓による彼女の復活の唄声は、多くの人々の感動を呼んだ。

なぜか、最近、夢に亡き人たちが、よくあらわれる。

